

Some Problems on the Nature Conservation of the Hakusan National Park

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-12-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00056331

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



命名者は、特徴記述に加えて、ラテン語の十分な記載文を与えるかまたは引用すべきである。

第39条

39.1 合法的に出版されるためには、1958年1月1日またはそれ以降に出版された現生藻類の種あるいは種以下の階級の新分類群の名称は、ラテン語の記載文あるいは特徴記述に加えて、明確な形態上の特色を示す図解を伴うか、あるいは以前に有効に出版された図解の引用を伴わなければならない。

第44条

44.1 1908年1月1日以前に出版された種または種内分類群の名称は、もしそれが本質的形質を示す分析をした図だけを伴っていても正式に出版されたものである。

第73条

73.1 名称あるいは形容語の原綴 (original spelling) は、印刷上あるいは正字法上の間違いを除き、維持すべきである。

73.2 「原綴」という語は、この条文においてその名称が正式に出版された時用いられた綴を意味する。それらは、書き出しの大文字または小文字の使用、これは印

刷体裁上のことなので、を指すものではない(第21条2, 勧告73F2を見よ)。

勧告73F

73F.1 すべての種および種内形容語は、大文字の初字の使用を希望する命名者は、その形容語が人名(実在でも架空でも)から直接由来したり、あるいは方言(または非ラテン語の)名、または以前の属名である時は、そのようにしてよいが、小文字の初字で書くべきである。

以上は、1981年8月「植物地理・分類研究会」第1回大会で、国際植物命名規約の話をさせて戴いた際に、テキストとして使用したものに、若干の加筆・訂正をし、第39条の訳文を追加したものである。この訳は、あくまでも仮訳であって、法律用語の訳の不十分なところ、細かいニュアンスの違いが、この訳では不適当な箇所も多々あると思うが、何等かの参考になれば幸である。訳文中の〔 〕内は訳者が補った部分である。大会では、さらに、いくつかの実例を挙げた所もあるが、実際に質疑応答がなされる場合でないと、かえって誤解をまねくので、ここでは全て、命名規約に実例として示されているもののみ取上げた。(Received Sept. 21, 1981)

菅沼孝之*：白山の自然と自然保護**

Takayuki SUGANUMA* : Some Problems on the Nature Conservation of the Hakusan National Park

1. 高山帯植生

白山の自然景観の基調をなす植生は、近年登山客の増加とともに特に高山帯において破壊が目立ちはじめた。その主な原因は、施設の建設ならびにその資材置場、歩道の造成、及び登山者の踏圧によるもので、多人数が集る室堂平及びその周辺、南竜ヶ馬場、通過地点では弥陀ヶ原でいちじるしい。これらの地点は中性お花畑ないし雪田植生で構成され、激しい場合は裸地化が進み、雨水特に融雪水によるエロージョンを伴い、時には深く抉られ、ために出来た溝に沿って雨水や融雪水が流失することにより、雪田植生の乾燥化が進むなど思わしくない変化が起きている。

演者らは、上記の重要地点で大縮尺の現存植生図を作成し(菅沼他, 1976, 78)、現状を把握するとともに、室堂平では1973年に高山植物が多い園地内に立入りを禁止するために保護柵を作することを提案した。保護柵は景観を損なわぬように高さを低くし、焼杭、しゅる縄を使った。同時に3か所の永久植生調査区を設け、植生の回復について毎年1回調査を行ってきた。永久調査区の大

きと当初の植生率は次の通りである。

調査区1	3×3 m	37.02%	園地内資材置場
調査区2	2×2 m	68.84%	園地沿流水溝附近
調査区3	2×2 m	44.39%	園地内集水地

6年経過した1979年には、調査区1は44.63%、同2は83.35%、同3は62.89%と植生率はいずれも増加しているが、速度は非常に遅いことがわかった。ただし、これは量的な面のみで、質的な面については問題にしていない。また、植生の回復は表土の流失をくいとめることが先決問題であることも判った。結論としては、一歩足を踏み出すときに、その行為が破壊につながらないかを慎重に考える必要があるということである。

高山植物の保護には、訪問者が多いことは喜ぶべき現象でないことは確かであるが、少人数であるから自然保護につながると考えることはできない。結局は共有財産である自然に接するマナーの修得の方が先決問題である。この問題が解決しない限りは保護柵による高山植物の閉じ込めをつづけるか、さもなければ登山者を制限し、徹底した指導を行う閉山策を断行する以外にないだろ

*奈良女子大学理学部生物学教室 Department of Biology, Faculty of Science, Nara Women's University, Kitauoyahigashi, Nara 630, **植物地理・分類研究会第1回大会(1981年8月4日)講演要旨

う。

2. 白山スーパー林道周辺植生

白山スーパー林道は建設にあたって種々物議をかもしながら1977年に開通した。全線の原植生はブナクラスに属し、山地帯にあたるが、多雪地であることと、急傾斜地であるために自然保護には意が払われながら建設が進められた。しかし、ヘアピンカーブ点を中心とした自然破壊は著しく、今なお土砂の崩落がつつき植生の回復がおくれている。

一方、石川県林業公社は、道路造成に伴う切り取り面、盛土地等に、白山自然保護センターの指導により種々な方法を用いて修景・緑化を試みている。緑化には自然種を用いることを第一にしているが、ヤマモモギの種子の入手が困難であるため、ヨモギが代用品になるなどの簡便策がとられているが、外来種は現在のところ、工事が初期に行われたところでのイタチハギの導入以外には見

られない。しかし、播種した種子の中に外来種が混入することはあり得るので、今後とも監視は必要である。

以上のような事態に対応するために、大縮尺(1/5000)の現存植生図の作成(1980~81両年にわたって作成)、ブナ林、クロベ林での定点観察、スーパー林道全線にわたって設けられた定点での写真撮影による植生の変化の把握作業がつけられている。

3. 主要文献

菅沼孝之・芳賀真理子・四手井英一・小松晶子 1976. 白山室堂平および弥陀ヶ原の植生。石川県白山自然保護センター研究報告, 第3集 31-47.

——— 1978. 白山南竜ヶ馬場の高山草原植生。

同上, 第4集 33-40.

——— 辰巳博史 1980. 白山室堂平の高山雪田植生の回復状況(1). 同上, 第6集 23-36.

○ 大谷茂先生のご逝去を悼む(長谷川義人) Yoshito HASEGAWA: Obituary of the Late Mr. Shigeru OHTANI

大谷茂先生は1981年1月24日に亡くなりました。氏は1900年(明治33年)1月14日横浜市港北区(現・緑区)池辺町の村長を務めた家柄の5男1女の次男として生まれました。父上毅氏並びに御兄第6人は皆様教育関係に携わったとのこと。氏は慶応大学の岡村周蹄先生の講義を受け生物学並びに教職(文検・植物・大正14年合格)への道を歩まれ、大正8年横浜植物会入会、久内清孝先生や松野重太郎・清水藤太郎・府川勝蔵氏(全て故人)等とは終生の友人でありました。また1929年(昭和4年)牧野富太郎先生宅で分類学講義を受けられ、私が牧野先生の晩年その会に所属していることもあって、よく先生の思い出を懐しみを込めて語られました。1949年(昭和24年)9月三浦半島研究会結成と共に副会長となり、この時のメンバー羽根田弥太(発光生物・市博物館初代館長)・柴田敏隆(現・山科鳥類研)両氏とは1954年4月横須賀市博物館設立時の僚友であり、氏は逗子中学校長在職中に研究員を委嘱され、1959年(昭和34年)校長退任後も一貫して館の運営に力を尽されました。1955年(昭和30年)神奈川県博物館協会自然科学部会長、1957年(昭和32年)日本シダの会入会、1958年(昭和33年)北陸の植物の会入会、1959年(昭和34年)横須賀植物会発足時には会長に推挙され、更に市文化財専門審議会委員も務められて居られました。1979年(昭和54年)神奈川県植物誌調査会発足と同時に初山泰一氏と顧問就任。先生の研究業績は市博物館研究報告に共著を含め18篇の主要論文があり、館雑報や他誌にも雑録など多数があります。特に神奈川県産・三浦半島産植物とシダ植物は終生の研究テーマでした。最期の論文は「イノデ類の新雑種について」(1980・共著)となりました。また氏は普及面にも尽力され後進の指導に当られました。作曲家・團伊玖磨氏も植物の弟子のお一人であることは團氏の著「パイプのけむり」に出てまいります。博物館研究報告に専門学者の論文を懲りし倉田・大場(秀)・中池・佐橋氏などシダ研究のものや初島住彦先生の論文が掲載され、特に倉田先生の多くの論文がシダ学の発展に与えた影響を考えるならば大谷先生が演じられた役割は特記されるものがあると考えられます。氏は若年に結核に冒され晩年はしばしば闘病生活を送られましたが不屈の精神で御活躍されました。私は追悼文を書く任ではありませんが、1965年(昭和40年)館に約5,000点の標本を寄贈した縁もあり、先生との多くの思い出があります。温厚・誠実なお人柄を偲びつつここに一文を草し、御冥福をお祈りする次第です。

○ 日置正臣さんを偲ぶ(城戸正幸) Masayuki KIDO: Obituary of the Late Mr. Masaomi HEGI

新種シビカナワラビを発見した日置さんが続いてキュウシュウイノデの大群落を発見した、というニュースを耳にして、早速探索に出かけたが、3回目にやっと見つけた。

その日、偶然、日置さんにお会いする光栄に浴した。それから、なんと17年、九州支部の会には熱心に参加し、懇親会では、いつも皮切りに歌をだして、座をにぎわしてくれたものだ。